

社會主義の進化

次 目

- (一) 空想的社會主義より科學的社會主義へ
- (二) えせ共產主義の教區
- (三) 改眞主義的の空想的の破滅
- (四) 權力掌握の道
- (五) 世界大戦の教訓
- (六) 露國革命の教訓
- (七) 資本主義成熟の程度と社會主義革命の時機
- (八) 無産階級のアイクテ
- (九) 革命と反動革命
- (十) テモクラシーと労働階級のアイクテ
- (十一) ソヴェエト
- (十二) 萬國労働者必勝の政治形式

「一」 空想的社會主義より科學的社會主義へ

「共產主義とは何か」。フリードリッヒ・エンゲルスは、一八四七年に書いた共產黨宣言の草案の中に、此間に對してかう答へた。「共產主義とは労働階級が勝利を得るに必要なる條件に關する教義である」。科學的社會主義の全精神は此一言で盡きてゐる。そしてマルクスとエンゲルスとの生涯の事業は、此定義の通り、資本主義的社會の發達の中に、結局労働階級が資本家階級に取て代らねばならぬ條件の發生することを明かにし、その點を共產主義的活動の土臺としよとしたことに、終始してゐるのである。

マルクス以前の空想的社會主義者は、ブルジョア社會の性質を説明した點では大功がある。フリーリエーでもサン・シモンでもオーウェンでも、皆な科學的社會主義といふ大きな建物を造る材料を集めた人達である。彼等が出なかつたならマルクスも出ずに終つたらう。けれども彼等は資本主義の社會を解剖し批判する點に於ては飽まで深刻に、徹底して居つたに拘らず、この資本主義の社會そのもの、中に、どうしてその社會を破壊するような民衆の勢力が出来るかといふ點を理解することが出来なかつた。つまり彼等は人類救済の立派な計畫を立てるには立てたが、さてその計畫